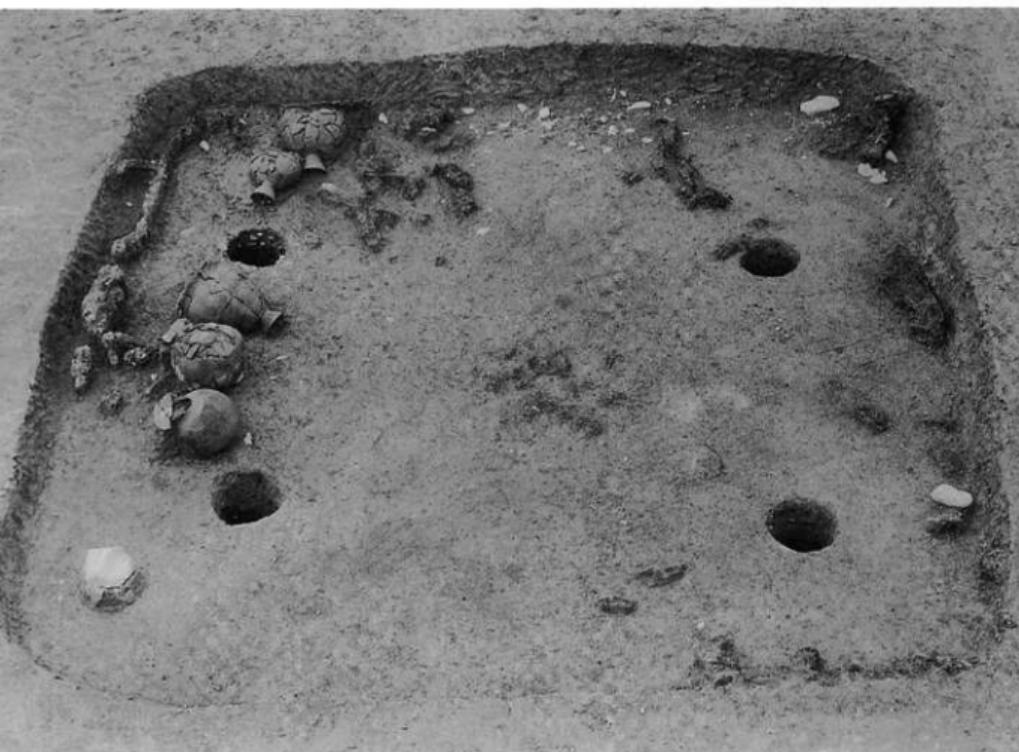


村前東A遺跡概報 4

一般国道52号線（甲西道路）改築工事・中部横断自動車道
建設工事に伴う埋蔵文化財調査（Ⅲ区・V区）



1997. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

序

村前東A遺跡は、現在の山梨県中巨摩郡御影町と若草町との境界域に広がる遺跡で、甲府盆地西部の御勅使川扇状地の扇端部に位置しております。

本遺跡は、1990年から一般国道52号線（甲西道路）改築工事及び、中部横断自動車道建設に伴い4次に渡る調査が行われています。第5次となる今年度で、本遺跡の発掘調査も終了することとなり、本書はその概要をまとめたものであります。

今年度の調査は、中部横断自動車道のインターチェンジ建設予定部分のうち、町道南側の昨年未調査であった箇所をⅢ区・町道北側をV区として実施しました。その結果、Ⅲ区では古墳時代・V区では近世・平安・古墳・弥生時代の文化層が明らかにされております。

近世では溝状の遺構が検出され、その覆土には多量の砂砾が充満しており、御勅使川氾濫の影響を想起させるものであります。平安時代では堅穴住居址10軒、掘立柱建物址1棟が検出され、該期集落の全貌が明らかになりつつあります。古墳時代では、前期に比定される堅穴住居址29軒、掘立柱建物址1棟が検出され、以前に調査したものを合わせるとその数は130軒を越え、該期の大集落となることが判明しました。弥生時代では、水田址検出面より約2m下から中期に比定される遺物包含層が新たに発見され、水田址の時期を考える上でも大きな成果が得られました。

この概報が多くの方々に利用いただければ幸甚です。末筆ながら、種々のご指導、ご協力を賜った関係各位、並びに直接調査に参加いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目 次

例 言

1. 遺跡と周辺の環境
2. 調査の経過
3. 今年度調査の概要
4. Ⅲ区の遺構と遺物
5. V区の遺構と遺物
6. 出出土器概観

1. 本書は1996（平成8）年度に実施した山梨県中巨摩郡御影町、若草町地内に所在する村前東A遺跡（むらまえひがしAいせき）の発掘調査の概報である。
2. 調査は中部横断自動車道建設工事に伴って、日本道路公団から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センター実施した。
3. 発掘調査は、Ⅲ区を三田村美彦・雨宮信仁、V区を石神孝子・清水裕司が担当した。
4. 本書の執筆・編集は上記の4名のほか、阿部歎・依田幸浩が担当し、文責は文末に明記した。
5. 本報告書に関わる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

1. 遺跡と周辺の環境

村前東A遺跡は、山梨県中巨摩郡柳形町十五所から同若草町十日市場の境界付近までの標高約280mの所に位置している。この地域は、甲府盆地西部にある御動使川扇状地の扇尖部から扇端部にかけて位置するため、砂礫の堆積が厚く、稻作には適さない地質となっている。こうしたことから、この地域では、稻作より、かつては養蚕、現在では桃、スモモ等の果樹栽培が盛んに行われ、今日に至っている。本年度の調査は、昨年度に引き続き、インターチェンジ部分の調査を行うこととなった。この

うち、調査区を東西に走る町道を境に南側をIII区（調査面積約12,000m²）、北側をV区（同約17,850m²）と設定した。調査の経過と共に遺構面はIII区が地表から約2メートル、V区が約1.5メートル以下の所において初めて確認されることが分かった。周辺の遺跡については、柳形、若草両町合わせて300遺跡以上確認されているが、村前東A遺跡のように中部横断自動車道に関する遺跡としては、現在のところ本遺跡を含め、10ヶ所が確認されている。

次に本遺跡を取り囲む中巨摩郡柳形町の地理的・歴史的環境について、簡単に触れてみたいと思う。まず地理的環境についてであるが、この遺跡を取り囲む地域は柳形町内でも北部に位置し、釜無川（富士川）の支流である御動使川扇状地（扇頂部；中巨摩郡白根町有野付近、西縁；大和川、南西縁；滝沢川）の扇尖部から扇端部にかけて立地するため、度々洪水等の水害に悩まされてきた様子が伺える。このため、洪水によって運ばれてきた砂礫の堆積層が厚く、地下水位が低くなってしまうため、水田が発達しにくい環境を形成している。（※発掘作業中に、本遺跡内で御動使川の状流水と考えられる湧水は認められなかった。）その結果として、自然と養蚕業や果樹栽培を中心とした地域へと移り変わっていった。また若草町

においては、その地理的特徴として、扇状地と氾濫源の二つに区分され、氾濫源は極めて平坦な土地であることが上げられる。

歴史的環境については、明治期になって廢藩置県が施行されて以後、最終的に小笠原町、柳村、野之瀬村が合併し、更に農村を併せて現在の柳形町が編成された経緯があり、町名は、甲府盆地西方にある巨摩山地中心部に位置する柳形山をその語源としている。また、若草町については、昭和28年、近隣の三恵村、鏡中条村、藤田村が合併し、若草村となった。



第1図 遺跡の位置図

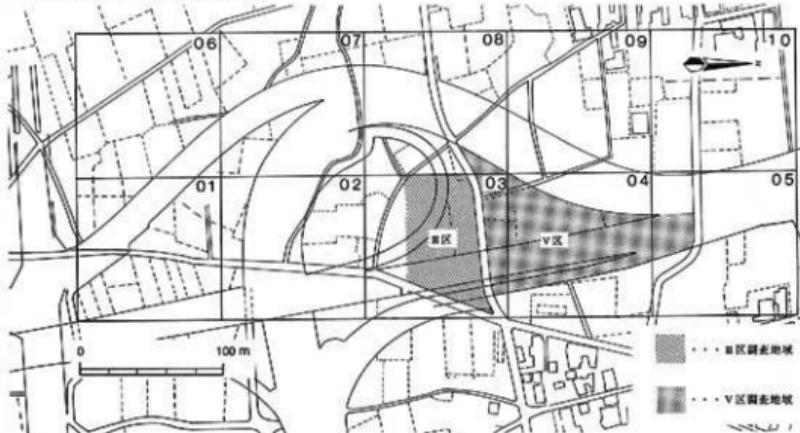
2. 調査の経過

本遺跡は、今までに4次に渡る発掘調査が行われている。第1次調査は1990年度に甲西バイパス建設に先立ち、畠地灌漑用パイプ移設工事に伴い行われた。その結果、古墳・平安時代の文化層が確認され、該期の遺構や遺物が検出された。このうち、古墳時代前期に比定される古式土師器は、当時県内では類例が少ない東海西部地域の特徴を持つものとして、注目された。

第2次調査は、1993年度に中部横断自動車道本線部分を対象とし、町道10号線を挟み南側をI区、北側をII区として実施した。文化層は近世・平安・古墳時代の3面が確認されており、各時代ごとに遺構や遺物が検出された。このうち、I区では旧河道を人為的に掘削したと考えられる溝状遺構から、古墳時代前期の古式土師器が集中して検出されている。

第3次調査は、1994年度に中部横断自動車道本線部のI区に北接する部分をI b区、II区に南接する部分をII b区として調査し、さらに中部横断自動車道インターチェンジ部分の北半をIII区、南半をIV区としてそれぞれ調査を行った。その結果、III・IV区では古墳時代の文化層よりさらに下層から、弥生時代の水田址と思われる畦畔が確認された。また、各調査区から古墳時代前期に比定される住居址が検出され、本遺跡が該期の大集落である可能性が出てきた。平安時代においても堅穴住居址が確認され、集落としての全貌が明らかになりつつある。近世では瓦生産を目的とした粘土採掘のためと思われる土坑や、畠状遺構、突發的出水で地面が深く抉り込まれた洪水跡などが検出された。

第4次調査は、1995年度に中部横断自動車道インターチェンジ部分のうち、1994年度未調査であった文化層をIV a区として実施した。未調査の文化層は、平安・古墳・弥生時代の3面に渡る。平安及び古墳時代では、3次調査と同様住居址等の遺構が検出され、多くの遺物が出土した。特に古墳時代前期に比定される住居址は90軒を数え、県内でも有数の該期大規模集落となることが明らかになった。弥生時代では、3次調査で確認された水田址の範囲がさらに広がることが判明した。



第2図 調査区の位置 (III区・V区)

5次調査となる今年度は、中部横断自動車道インターチェンジ部分のうち、町道10号線南側の昨年度未調査であった箇所をⅢ区、町道10号線北側をV区として行った。調査の結果、Ⅲ区では古墳時代の文化層が、IV区では弥生・古墳・平安・近世の文化層が確認された。発掘調査は1996（平成8）年4月15日から同年12月26日まで行われ、1997（平成9）年1月から3月まで整理作業を実施した。なお、今年度をもって村前東A遺跡の発掘調査はすべて完了した。

3. 今年度調査の概要

ここでは村前東A遺跡（Ⅲ区・V区）で確認された文化層について、各区ごと時代順に説明する。

1) Ⅲ区

Ⅲ区は昨年度までに近世（1面）から平安時代（2面）の調査を完了しており、今年度は古墳時代（3面）以前の文化層の調査となった。

3面（第3図）では、古墳時代の住居址24件・掘立柱建物址1棟が検出された。住居址は調査区西側とほぼ中央に集中する傾向が見られ、その多くが重複あるいは、近接して構築されている。プランは一辺が約5～7mの正方形を呈すものが主体となり、4本の主柱穴と炉址が確認されるものが多い。炉址は地床炉で、浅い掘り込みに粘土を張った所謂火皿を持つものや、縁辺の一部に凸堤を持つものが認められた。また、住居址のコーナー付近には貯蔵穴と思われる凸堤の巡る土坑が検出されたものがある。掘立柱建物址は群在する住居址からや離れた、調査区の北側で2×3間のものが1棟検出された。これらの遺構からは壺・甕・ヒサゴ壺・高

环・器台・手焼り形土器など、古墳時代前期に比定される古式土師器が出土している。この中には東海地方西部の影響を受けたものが、多数含まれている。

4面では昨年検出された弥生時代水田址の畦畔と思われる遺構の広がりを確認する作業を行ったが、本区では検出されていない。



PI. 2 Ⅲ区全景

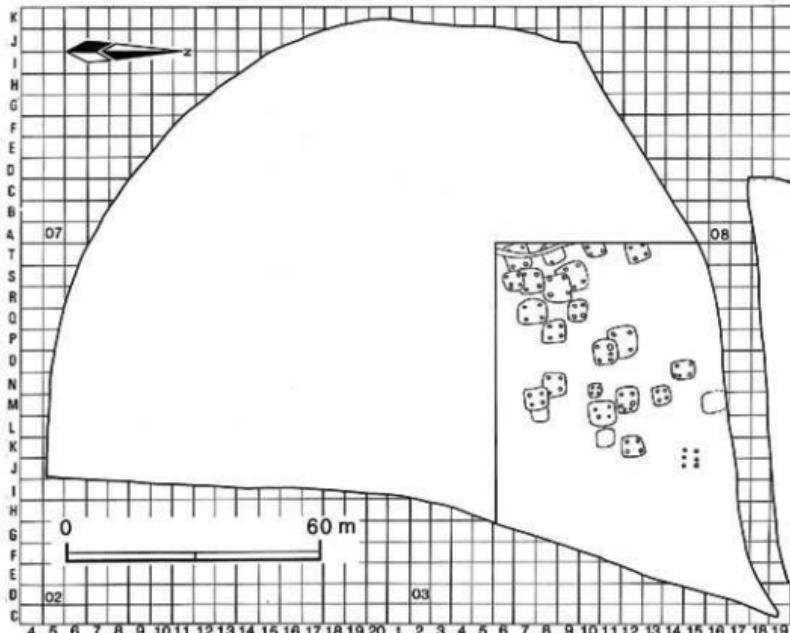
2) V区

V区では、近世（1面）・平安（2面）・古墳（3面）・弥生（4面）の各時代の文化層が確認された。以下、時代毎に概観してみたい。

4面（第4図）では、弥生時代水田址の確認を行ったが、本区では検出されていない。しかし、水田址確認よりさらに約2m下層から、弥生時代中期に比定される土器を包含する層が確認された。本層は暗褐色を呈す粘性の強い土層で、その大部分は砂砾層に浸食され残存状況は良くない。また、遺構と思われる落ち込みも確認できなかった。出土した土器はいずれも胴部破片で、十数点と少なく器形の伺えるものは皆無である。ただ、本区で確認された層位の状況から、昨年IV-a区で検出された水田址の時期が、弥生時代中期以降古墳時代前期以前に構築されたことが確認されたことは大きな成果であった。



PI. 3 III区作業風景



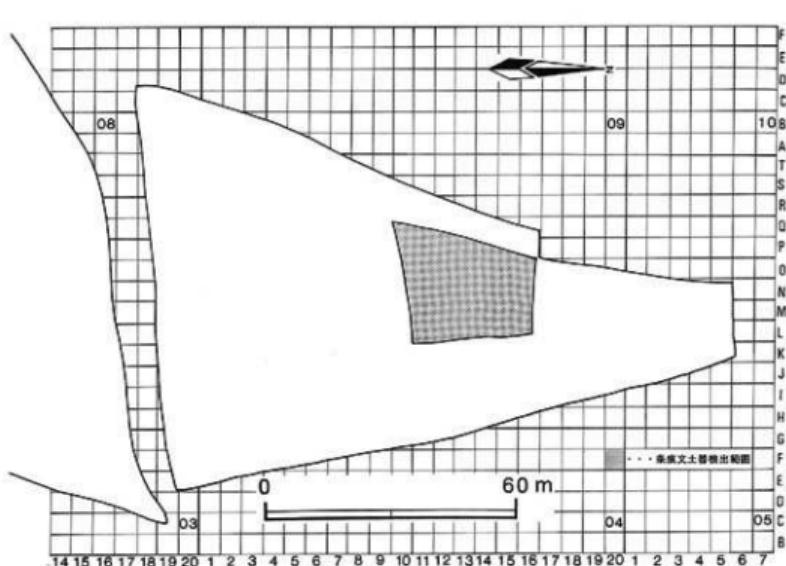
第3図 III区(3面) 古墳時代造構配置図



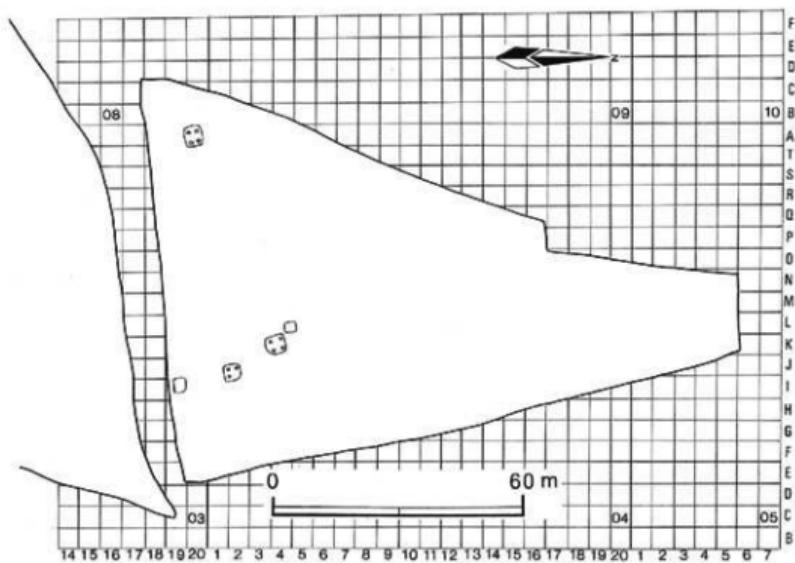
PI. 4 V区全景

だ地床炉のほか、縁辺の一部に縄を配する物がある。住居址からは古墳時代前期に比定され

3面(第5図)では、古墳時代の住居址が5軒検出された。いずれも調査区の南側で確認されており、北側で遺構の分布は見られない。プランは、一辺3~5mを測る方形となり、4本柱主柱穴となるものが多い。炉址は床面を若干掘り込んだ



第4図 V区(4面)弥生時代包含層検出範囲



第5図 V区(3面)古墳時代遺構配置図

る壺・甕・高坏などが出土していることから、町道10号線南側のⅢ区で確認された該期集落の一部であると同時に、本遺跡における古墳時代前期集落の北端が、確認されたこととなる。

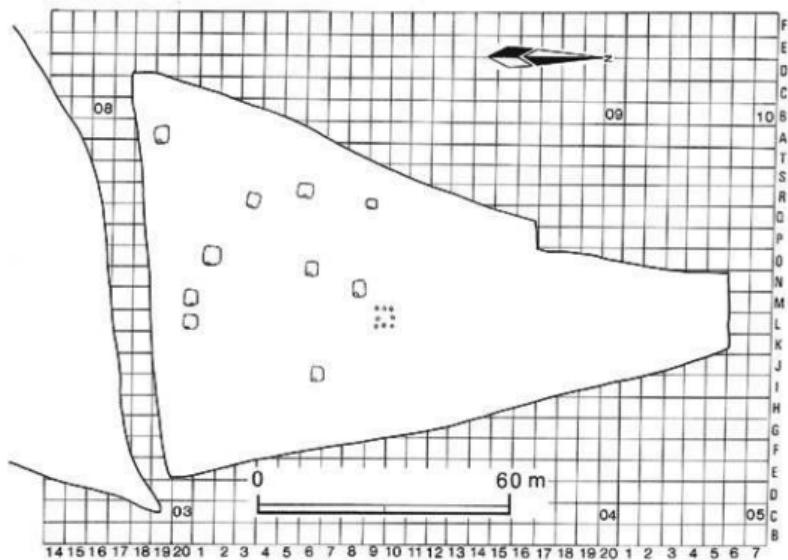
2面(第6図)では、平安時代の住居址10軒、掘立柱建物址1棟が確認された。これらの遺構は調査区南側に分布し、北側は古墳時代同様空白地帯となる。住居址は一辺2~5mを測る方形プランとなり、竈は東壁の中央から、南東コーナーにかけて構築されるものが多い。掘立柱建物址は3×3間となる。遺物は主に住居址から土師器壺・甕、須恵器壺のほか鍛錘車・鎌などの鉄製品が出土している。

1面(第7図)では近世以降に構築されたと考えられる溝状の遺構が検出された。このうち、堀り方のしっかりしたものの中には砂礫が充満しており、御駒使川氾濫の影響を想起させるものである。遺物は、古墳から平安時代にかけての土師器や近世陶磁器の破片が僅かに出土したにすぎず、詳細な時期は不明である。

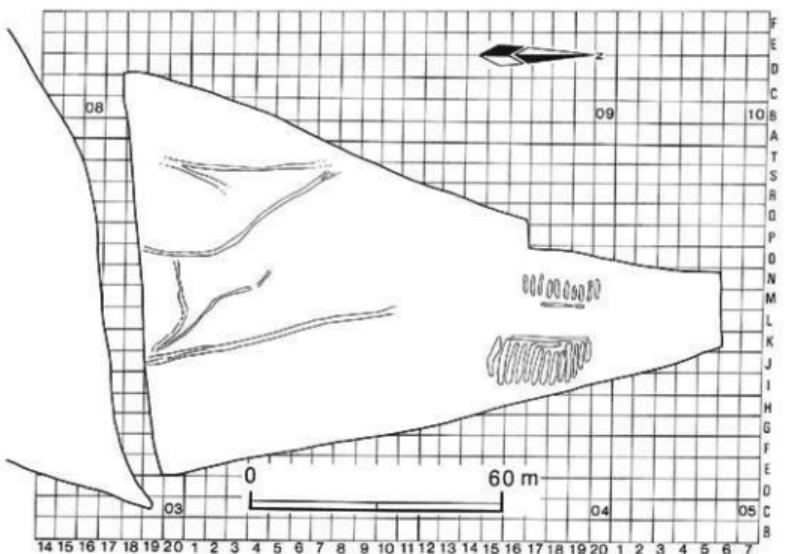
三田村美彦



P I . 5 弥生時代中期包含層調査風景



第6図 V区(2面)平安時代遺構配置図



第7図 V区(1面)近世遺構配置図

4. III区の遺構と遺物

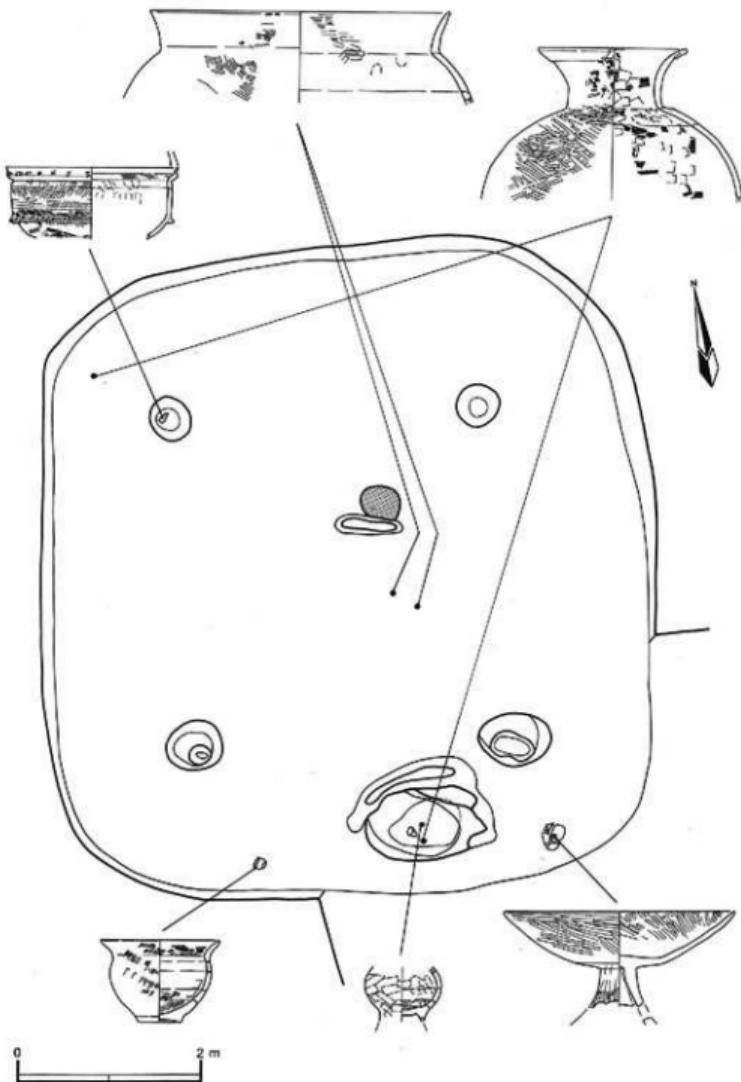
1) 第139号住居址 (第8図 PI. 6)

第139号住居址は03大グリッドのO～Q-11～12グリッドに位置する。住居址は長辺約6.6m、短辺約6.3mで、やや南北方面に長い隅丸長方形のプランを呈する。壁高約20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で客室を利用してつき固める貼床になっている。南西コーナー付近で第138号住居址と重複しているため、重複部の壁は確認されなかった。炉は住居址中央や北寄りに設置されている。床面を浅く掘り込み、上面に粘土を貼った地床炉に類似したタイプで南側に凸堤と呼ばれる粘土製の盛り上がり施設を伴う。柱穴は直径30～40cm、深さ40～70cmの不整円形ピットで、各コーナーから1m程内側に配置されている。補助的な柱穴などは確認されなかった。住居址入り口と見られる南辺付近には、食料などを貯蔵する貯蔵穴と考えられる施設が設置されている。北側に凸堤を配し、ピット内に棚状の施設が設けられている。

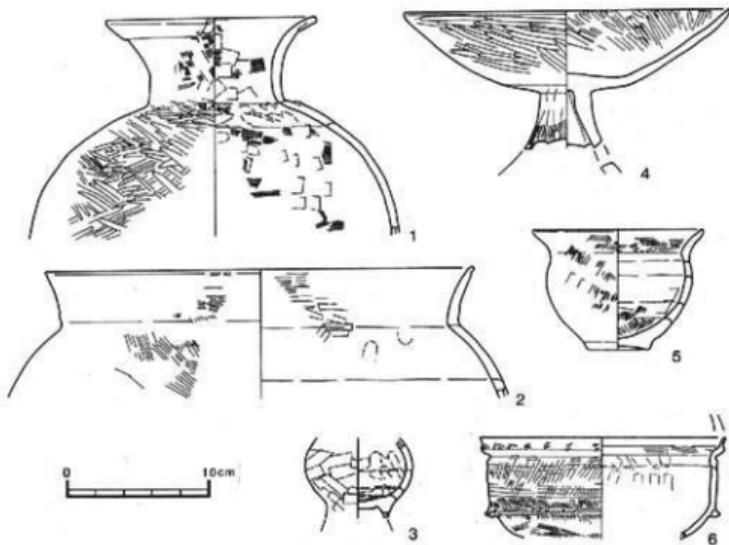
遺物は復元可能な土器が6点（第9図）、土器片を含めると70点余りが床面直上から覆土内にかけて出土している。ほぼ完形の土器が貯蔵穴周辺に集中する。図示した6点の内1・2・4・5は床面直上に倒立または押しつぶされた状態で出土した。1は折り返し口縁の壺で、円形浮文が肩部の3箇所に2ヶずつ配される。腹部外面にはミガキ、内面には範ナデが見られる。2は壺の口縁部付近の土器片で、口縁部を横位のハケメ、肩部を斜位のハケメ整形の後、ナデが施される。3・4・5はいずれも倒立した状態で出土した。3は貯蔵穴内から出土した壺形の手捏土器で、底部は上げ底状につまみ出される。4は南東コーナーから出土した脚部に変化点をもつと思われる高壺で、壺部下段に稜をもち、脚部には3つの透し孔が存在する。5は南西コーナーから出土した小型壺で、口縁が広く、底部は凹溝する。6は北西コーナー付近の柱穴内から出土した手焙形土器の土器片である。手焙形土器はその形態が現代の手焙用火鉢に類似する土器で祭祀行為に使われたと見られるが、詳細は不明である。今回出土した土器片は口縁部および鉢部で、手焙形土器最大の特徴である腹部は欠損している。口縁部は全体の1/4が残存し、欠損部の大部分に覆部が接合されていたと推定される。口縁部下段には本遺跡出土のS字状口縁台付壺（以下S字壺）、その中でも古相のものに見られる「ノの字」状突起が施される（註1）。手焙形土器は受口状口縁とくの字状口縁とで大別されるが（註2）、この手焙形土器の口縁部は受口状口縁に分類され、S字壺との対比および鉢部に刻目突起・ハケメ等の装飾が見られることから、古墳時代前期の中でも古相に比定される土器である。



PI. 6 第139号住居址



第8図 第139号住居址遺物出土状況



第9図 第139号住居址出土土器

以上のことから、本住居址は村前東A遺跡における古墳時代の遺構の中でも最古段階に位置する遺構と推定される。

依田幸浩

引用・参考文献

註1 小林健二「外来系から在来系へ—甲斐のS字彫の変遷」『研究紀要9』 1993 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

註2 高橋一夫「手焙形土器研究(1) - 東国編 - 」「塙地区也君下津弘君追悼論文集 塙地区文化の研究」 1996 塙地区文化財担当者会



P1. 7 第139号住居址手焙形土器出土状況

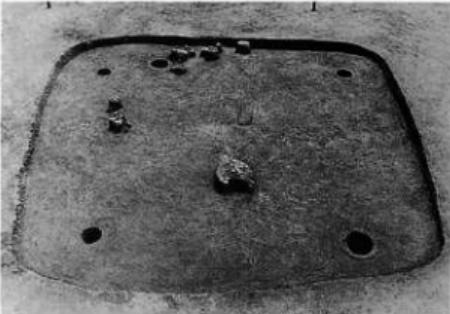


P1. 8 第139号住居址貯藏穴

2) 第146号住居址（第10図、P I. 9）

第146号住居址は、古墳時代住居址群の中でも北東端に位置し、ほかの多数の住居址の様に重複は見られず単独で検出された。また、出土遺物であるS字状口縁台付壺の横ハケ成形の消滅や、小型丸底壺の出現など、本遺跡古墳時代住居址群の中でも新しい時期に属する住居址と思われる。位置は、03大グリッドK11~12、03L11~12グリッドで、やや台形状の隅丸方形を呈する。規模は、西壁の長さ約4m30cm、東壁の長さ約5m30cm、東西幅5m25cmを測り、壁はゆるやかに立ち上がる。深さは、壁際で10~13cm、中央最深部で15cmを測る。覆土は褐色のシルト質土を主体とするが、全体に砂質状で弱い土である。床面は、ブロック状の硬化質土が若干量みられるが、明瞭な硬化面は確認されなかった。また住居址中央よりやや北東寄りの床面付近で若干量の焼土が検出されたが、床下に達する様な堆積は見られなかった。柱穴は、各コーナーより中心に向かって約80cmの位置に4基、北東隅の柱穴の南側90cmの位置に1基、計5基が検出された。上部径25~30cm、深さはそれぞれ30~40cmを測る。遺物は、土師器破片10点と個体上器10点余りが、覆土中あるいは床直上から出土した。個体上器は住居址内の北側と東壁寄りに集中が見られる。北側の集中では床直上から、小型丸底壺（1）、小型壺（2）、S字状口縁台付壺の口縁部破片（12）（13）床から10数センチの覆土中より脚部を欠いた器台（11）

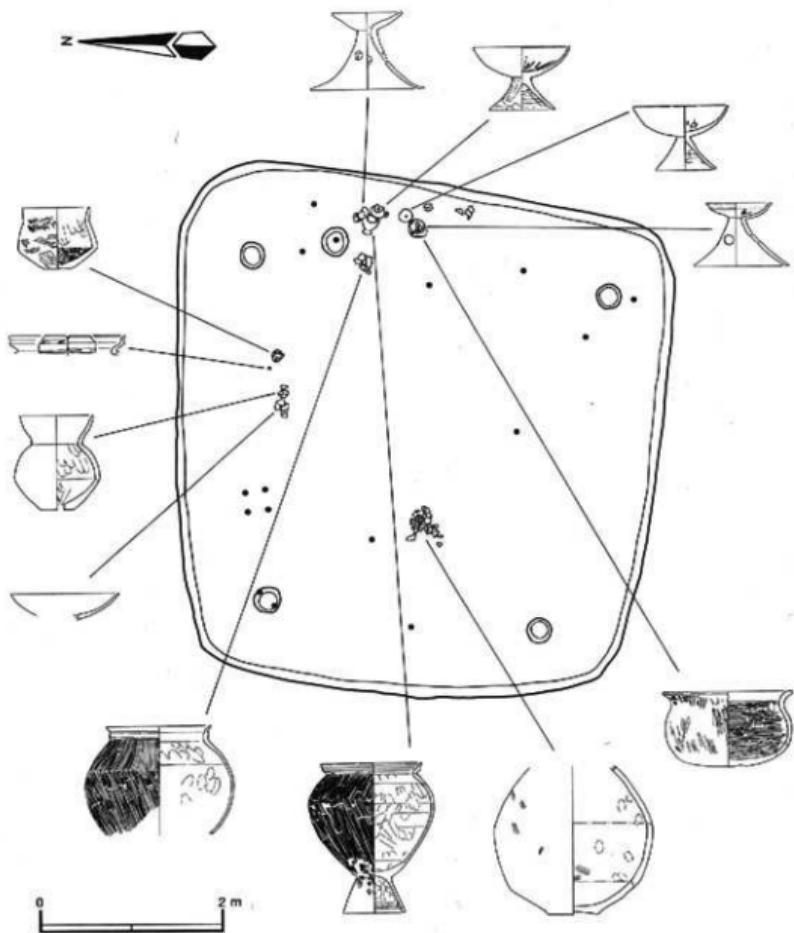
などが出土した。小型丸底壺（1）は、器高約13cmで約1/2を欠損する。外面には成形痕がほとんど見られず、内面に指ナデによる指頭痕が見られる。小型壺（2）は、器高約8.5cmで口縁部の一部を欠損する。外面は、ハケによる成形の後、ミガキを施し胴下半部にはヘラ削りによる成形が見られる。内面は、底部から胴下半部にかけてハケ成形を施し、胴上半部には指ナデによる指頭痕が見られる。S字壺の口縁部破片（12）（13）は、他よりやや時期が古く口辺部の有段部分に横ハケが見られる。東壁寄りの集中部分、床直上からはS字状口縁台付壺（5）の破片のまとまり、さらにその脇から完形のS字状口縁台付壺（6）器台（10）、伏せられた様な状態で、ほぼ完形の高壺（8）が、ひとつのまとまりをもって出土した。そのすぐ南側からも器高のやや低い広口の壺（3）その壺の中より、器台（11）、また壺のとなりからは、やはり伏せられた様な状態で高



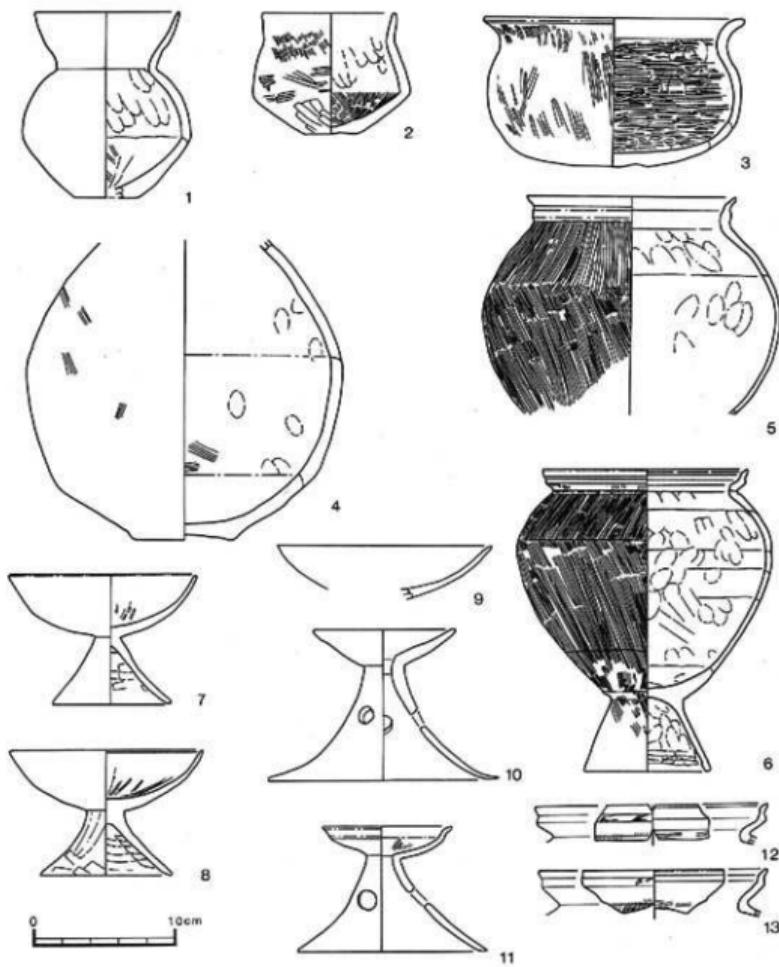
P I. 9 第146号住居址全景



P I. 10 第146号住居址遺物出土状況



第10図 第146号住居址遺物出土状況



第11図 第146号住居址出土遺物

壺（7）が、ひとつにまとまり出土した。またやや大型の壺（4）は住居址中央付近の覆土中より破片のまとまりで出土した。S字状口縁台付壺（5）は胴下半部の大部分を欠き、胴部がやや球形で胴上半部と下半部にそれぞれ斜位のハケで成形される。内面には指ナデによる指頭痕が見られる。S字状口縁台付壺（6）は完形で、胴上半部と下半部を分ける明瞭な輪積痕、その上下をそれぞれ斜位のハケで成形される。内面は輪積痕とそれを成形する指ナ

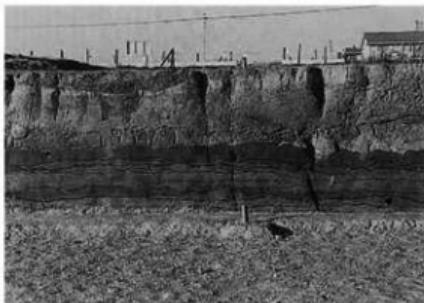
テによる指頭痕が見られる。脚部内面は指頭痕と、端部の折り返し、ヘラによる成形が見られる。高坏(8)は、坏部内面にミガキが施され、脚部には内外面ともヘラ削りによる成形痕が見られる。器台(10)は、ハの字状の脚部に3ヶ所の孔が開けられる。広口壺(3)は、器高約10cmを測り、外面に縱のミガキを、内面に横のミガキを丁寧に施される。その中から出土した器台(11)は、陵をもつ小止めの坏部、ハの字状の脚部には3ヶ所の孔が開けられる。高坏(7)は、坏部内面にわずかにミガキ痕が見られ、脚部内面にはヘラによる成形が施される。

阿部熱

5. V区の遺構と遺物

1) V区出土の弥生土器について

調査の概要でも記したとおり、本区では弥生時代中期に比定される土器が出土している。該期の土器は、本区の北側に隣接する十五所遺跡で出土していることから、本遺跡でも上層の調査が完了した箇所からトレンチを設定し、確認作業を実施した。その結果、V区04大グリッド

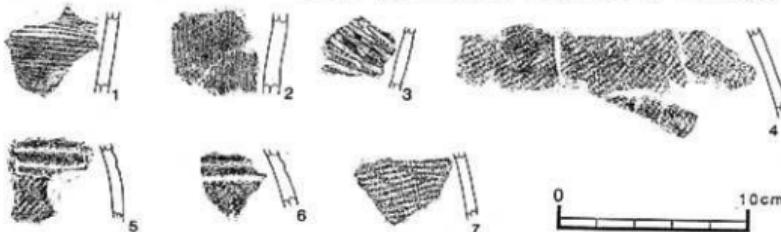


P1. 11 弥生時代中期遺物包含層断面図

で地表下約3.5mの深さから、該期の土器を包含する層を検出するに至った(P1. 11●印)。出土した土器は計17点で、器形の伺えるものは無く全て破片である。このうち、文様が識別できる7点を図示した(第12図)。

1は、条痕が横走する脚部破片である。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混入する。2は、細かい条痕が縱位に施される脚部破片である。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混入する。3は幅広の条痕が斜位に施される。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多く混入する。4~7は、いずれも原体L Rの単節繩文が縱位回転施文され、色調が淡褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を混入する点で共通しており、互いに近接して出土していることから同一固体の可能性がある。4は、脚部上半の破片である。5・6は、2条の横走する沈線下に上記した原体の繩文が施文される。脚部上半から、頭部にかけての破片であろう。

弥生時代中期に比定される土器は前述した十五所遺跡や、甲西町の油田遺跡などで良好な資料が出土しており、これらとの比較を行い細別型式を検討する必要があろう。三田村美彦



第12図 V区出土弥生土器

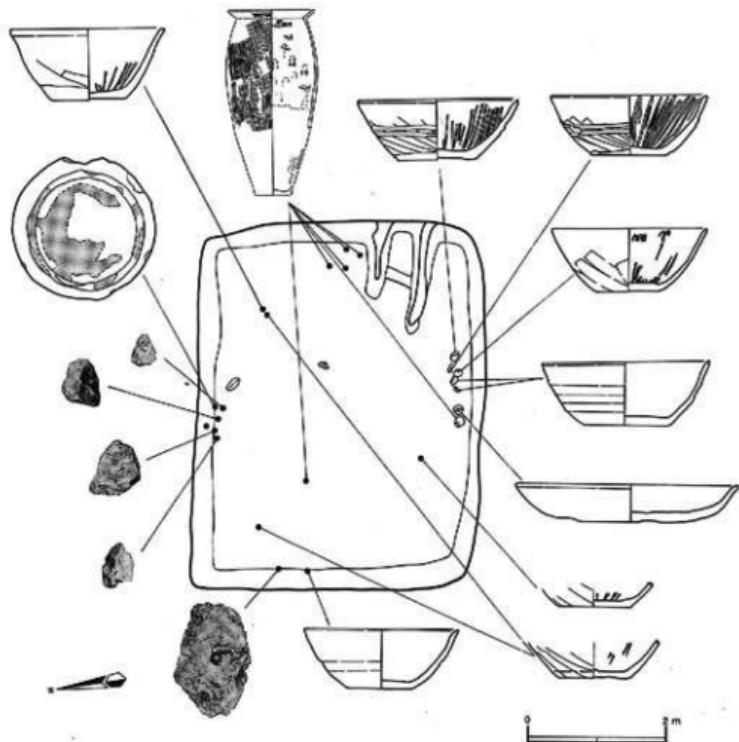
2) 第159号住居址 (第13図 P1.12)

第159号住居址は08大グリッドA19グリッドに位置する。住居址は長辺約3.7m、短辺約3.0mで方形プランを呈する。壁高は約50cmを測り、掘り込みがしっかりとしており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は比較的平坦で客土によって貼床が施されているが、北西部においては貼床は確認できなかった。また柱穴も確認できなかった。竈は東壁の南寄りに築かれており、左袖の一部と右袖が残存する。両袖は東壁上部より西方向に床面に向かって下降するようになっている。竈の南北セクション図をみると、袖部と同じ工芸材が竈の天井部にはみられず天井部の破壊が推測される。竈の火床面は東壁より西方に約54cm、南北約22cmを測り、火床面上方に約2~20cm焼土が堆積している。掘り方の規模は東西約110cm、幅約56cmを測り、掘り方の中央部に径約35cm、深さ約12cmのピットがあり、南東部には径12cm前後、深さ約10cmの小ピットがみられた。

遺物は復元可能な土器が10点、土製品と思われるものが1点、(第14図 P1.13)、その他の土器片を含めると39点余りが住居址内より出土している。復元可能な土器10点のうち2・4・5・6・9の5点は南壁に沿って床面直上に出土した。2は口径11.4cm、底径6.0cm、器高4.3cmの壺で色調は明茶褐色、胎土は赤色砂粒を含み密である。体部内外面には回転ナデが施されており、外面には水引痕の継がみられる。4は口径10.7cm、底径2.3cm、器高4.5cmの壺で色調は明茶褐色、胎土は赤色砂粒を含み密である。口縁部外面には回転ナデがみられ、体部外面にヘラケズリが施されている。また内面には暗文がみられる。5は口径10.6cm、底径5.0cm、器高4.1cmの壺で色調は暗茶褐色、胎土は細砂粒を含み密である。口縁部外面には回転ナデが、体部外面にはヘラケズリが施され体部上部には二条の回転ヘラナデがみられる。また底部には糸切り痕がみられ、内面には暗文がみられる。6は口径11.2cm、底径5.4cm、器高4.2cmの壺で色調は明赤褐色、胎土は赤色粒子、赤色細砂粒、黒色細砂粒を多く含み密である。口縁部外面には回転ナデが、体部外面にはヘラケズリが施されており、体部上部には二条の回転ヘラナデがみられる。また底部には糸切り痕がみられ、内面には暗文がみられる。9は口径15.1cm、底径7.0cm、器高2.6cmの壺ではほぼ完形である。色調は淡赤褐色である。胎土は赤色粒子、白色粒子、赤色細砂粒を多く含む。内外面には回転ナデが施されている。また底部内面には凹凸がみられる。8は壺の底部で南壁のやや西寄りの覆土中より出土した。底径5.0cm、残存高1.2cmで、色調は明茶褐色である。胎土は赤色細砂粒を含み密である。体部下半部外面にはヘラケズリがみられ内面には暗文がみられる。7は北東コーナーと北西コーナーの覆土中より出土した壺の底部である。底径2.4cm、残存高2.5cmで色調は淡茶褐色である。胎土は赤色細砂粒を含み密である。体部下半部外面にヘラケズリが施され、内面には暗文がみられるが殆ど磨滅している。また底部には糸切り痕がみられる。1は西壁の北寄りの覆土中より出土したほぼ完形の壺で、口径10.7cm、底径4.3cm、器高5.1cmである。色調は明茶褐色である。胎

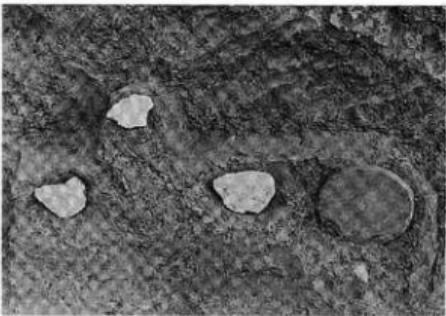


P1.12 第159号住居址

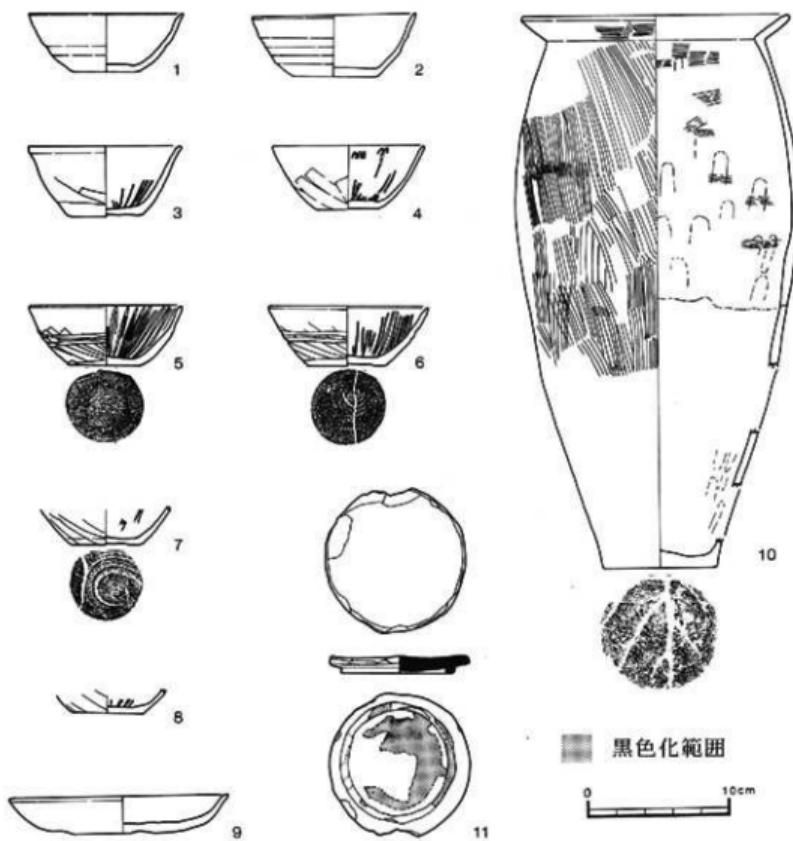


第13図 第159号住居址遺物出土状況

土は赤色細砂粒を含む。内外面には回転ナデが施されており、水引き痕の跡がみられる。3は北東コーナーより出土した壺で口径10.8cm、底径4.9cm、器高4.8cmである。色調は橙色で胎土は赤色・白色粒子、赤色・白色細砂粒が多く含まれ密である。口縁部には回転ナデが、体部下半部外面にはヘラケズリが施されている。また体部下半部内面には暗文がみられる。10は竈の北寄りから出土した長胴壺で口径18.6cm、底径10cm、器高38.5cmである。色調は暗



P I . 13 第159号住居址遺物出土状況



第14図 第159号住居址出土遺物

茶褐色、胎土は金雲母、砂粒子を含みやや粗外面は縱位のハケメがみられるが、摩耗して不明瞭である。内面輪積み痕がみられ指ナデや指頭圧痕がみられる。また横位・縦位のハケメがみられるが不鮮明で、底部には木葉痕がみられる。11は北壁中央の壁際の覆土中より出土した須恵器の底部で、底径9.9cm、残存高1.25cmである。色調は灰白色、胎土は白色粒子、白色・灰色細砂粒を多く含み密である。内面と高台部内外面には回転ナデが施されており、側面には面取り加工による剥離痕と研磨痕が認められる。底部外面には黒色化した部分がみられ転用窯の可能性がある。また北壁中央及び北西コーナーより石英の未加工品が合計5点出土した。

雨宮信仁

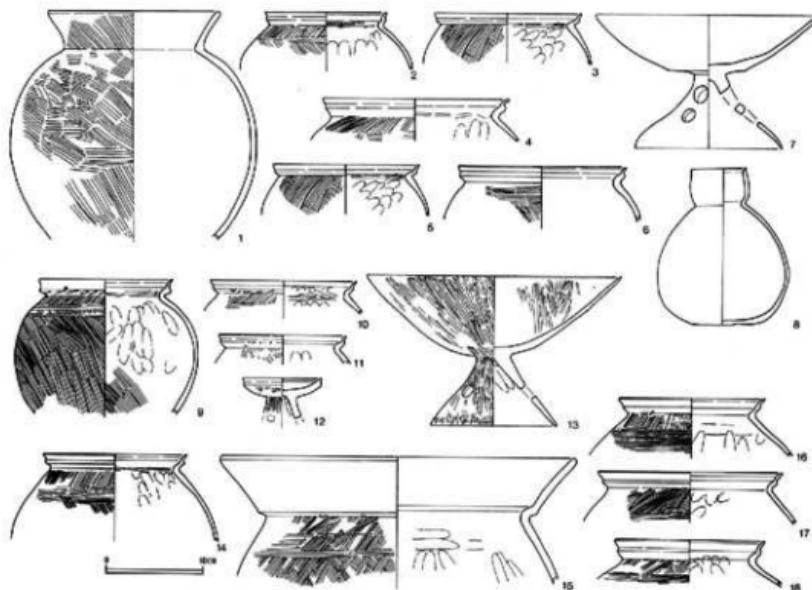
6. 出土土器概観

1) 村前東A遺跡出土土器の概略

本遺跡は古墳時代前期を通じて継続して営まれた集落跡であることは、既に概報等で報告している通りである。4年間の発掘調査の結果、確認された住居址は約150軒、掘立柱建物跡は約10棟、溝数条である。これらに伴ってまた、多数の資料を得ることができた。今回は発掘調査の傍らで行ってきた整理作業結果から、本遺跡出土の遺物について概観してみたいと思う。

本遺跡では多量の東海系土器が出土したが、中でもS字状口縁台付甕（以下S字甕）は浪尾平野の編年と対比させることで、遺構の時期決定の根拠となっている。本遺跡のS字甕は、1993年の日本考古学協会新潟大会（註1）、及び1994年の庄内式土器研究会（註2）で提示された甲斐編年に基づく、2b期から5期までに位置付けられるものが多量に出土しており、これらには漸移的に型式変化していく様相が認められる。このような作業から現在までに約50軒の住居址について、その帰属年代が判明している。具体的には甲斐編年の2b期に位置付けられ、本遺跡では最も古相を呈するS字甕を出土する住居址が8軒、定着期と考えられる3期には14軒、最も集落の営みが活発化する4期には16軒、集落が終焉に向かう5期には3軒が確認される。

2b期に位置付けられる代表的な住居址には、Ⅲ区第14号住居址（註3）やⅣa区第92号住



第15図 出土土器

居址、第136号住居址等が挙げられる。これらの住居址から出土するS字甕は口縁部中段にはクシ状工具による刺突がめぐり、下段にはノの字状に沈線が施される。頸部内面にはハケがめぐる。また高杯は杯部が大きく開き、口縁端部は若干立ち上がる。脚部は外反し、透孔付近に変換点を持つ。これらの高杯は濃尾平野で出土するものと非常にその特徴が類似しており（註4）、廻間Ⅱ式期初頭に東海系土器の移動が広範囲に認められる第1次拡散期（註5）に該当する時期でもあり、S字甕と併せてその影響を強く受けているものである。これらの出土土器は数量的にもまとまりを見せており、甲府盆地の古式土器群の成立を考える上で重要な位置を占めるものと考えられる。

3期に位置付けられる住居址はIV a区第68号住居址等が代表的なものである。S字甕口縁部には2b期に施されていたクシ状工具による刺突が消滅するが、口唇部はつまみ上げられる。胎土にも変化が見られ、次第に土器が定着していく時期であると思われる。またその一方でこの住居址からは濃尾平野で出土するものとそっくりのヒサゴ壺や高杯及び、手焙型土器等甲府盆地外からもたらされた器種が多量に出土しており、この時期においても土器の移動がなお活発であった側面も窺うことができる。

4期にはIV区第13号住居址（註6）やIV a区第99号住居址等の他にI区第6号溝からも多量の遺物が出土するなど、最も多くの資料を得ることができた。その結果、S字甕は口縁部の屈曲が明確でなく、形状も球胴を呈するなど在地化の傾向を見せ、段階を追って様々なタイプに変化していく様相が徐々に明らかになってきた。また今まで希少であった幅広い口縁部を持つタイプのS字甕の出土が目立ち、その資料数を一気に増加させた。その他の器種においても高杯等今までには存在しないタイプのものが新たに出土するなど多様性を見せている。また同様に在来の系譜を引くと思われる土器群も認められ、定着化する外来系土器群との関係及び、在来系土器の変遷過程が大変興味深い。

5期に位置付けられる遺構は現在のところ非常に數少ない。IV a区第58号住居址及び第146号住居址等が挙げられるが、いずれも遺物の量は非常に多く、該期のセット関係を把握する上で重要な資料である。S字甕は口縁部の屈曲がさらに弱まり、肩部の横ハケが完全に消滅する。胴部に施されるハケは形骸化し、粗いものが目立つ。第146号住居址では、これらの特徴を持ったS字甕に伴って小型丸底壺が出土している。また高杯は、杯部が楕形で脚部は短く、ハの字状に開く形態のものが見られるなど、前期の中でも非常に新しい印象を受け、前期から中期への過渡期を考える上で非常に参考になる土器群である。

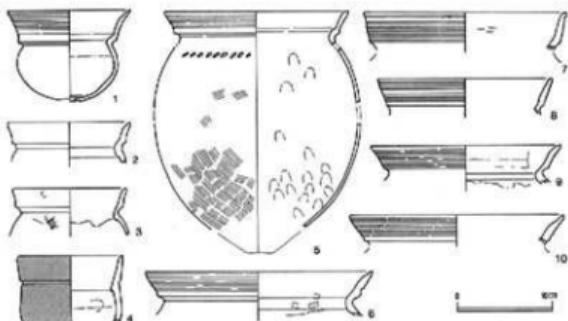
この他紙面の関係で割愛せざるをえないが、バレススタイル壺やタタキ目を持つ甕など興味深い資料がまだまだ数多く出土している。上記のこととも考え合わせて、甲府盆地の古墳時代前期を考えていく上で本遺跡の土器群は重要なヒントになるに違いないのである。

2) 村前東A遺跡出土の北陸系土器

東海系土器群の研究が進む傍らで、北陸系土器の移動とその重要性は早くから指摘されており（註7）、甲府盆地内においても古墳時代前期の外来系土器が着目されるのに伴って、その存在は気付かれ始めてきた。近年においては資料数も増加し、その重要性が益々指摘されている（註8）。また東山北遺跡の調査により、まとめた資料が得られるなど（註9）、資料数の増加は認められるが、東海系土器と比較してもその数は依然として少なく、不透明な部分も多い。このような状況の中で本遺跡では比較的数多くの北陸系土器を得ることができた。

その中には今まで口縁部等の破片のみの出土のため、全体像をつかむことが困難であった器種も含まれている。ここではこのような土器の提示を中心に整理作業の中で気が付いたことを書き留めたい。

本遺跡の北陸系土器は住居址及び包含層より出土が確認されている。器種については堺



第16図 北陸系土器

が大部分を占めるが、全体像を把握できるものは数点に限られる。その代表的なものが第16図1・5である。1は壺でⅢ区08G07グリッドより出土した。幅広く外反する口縁部には擬凹線が施され、胴部は非常に薄く仕上げられている。小さな底面を持つが、孔が穿たれている。東山北遺跡第9号溝より出土した小型壺に類似する。また5は甕でⅢ区08C05グリッドより出土した。口縁部は幅広く擬凹線をもち、肩部には刺突文が巡る。器壁は極めて薄く、外面は胴部から底部にかけて斜めハケが、内面は指頭痕により調整される。4は壺でⅡ区08G14グリッドより出土した。外面は赤彩される。その他いずれも口縁部が外反し、口唇部はつまみ上げられ、面取りが施されている。搬入品と思われるものではなく、全て在地で製作されたものであろう。この他住居址等においてS字甕に伴って北陸系土器が出土している。時期的にはおおよそ甲斐編年の2b期から4期に位置付けることができるS字甕に伴っているようである。

現在は不透明であるが、様々な問題を含んでいる北陸系土器の様相にさらに迫ることができるように今後さらに検討を加えていきたい。

石神孝子

註

- (1) 小林健二 「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993.
 - (2) 小林健二 「甲府盆地の外来系土器」「庄内式土器研究V」 庄内式土器研究会 1994.
 - (3) 小林健二 「甲斐における庄内式併行期の土器」「庄内式土器研究III」 庄内式土器研究会 1994.
 - (4) 中山誠二・三田村美彦 他 「村前東A遺跡概報2」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第103集 山梨県教育委員会 1995.
 - (4)(財) 愛知県埋蔵文化財センター 赤塚次郎氏にご教示賜った。
 - (5) 赤塚次郎 「考察」「越間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集(財) 愛知県埋蔵文化財センター 1990.
 - (6) (2) 同じ。
 - (7) 比田井克仁 「南関東出土の北陸系土器について」「古代」第83号 早稲田大学考古学会 1987.
 - (8) 中山誠二 「身沢遺跡における外来系土器の諸例」「研究紀要」7 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1991.
 - (9) 小林健二 「第6節 莎生土器・古式土師器について」「東山北遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第79集 山梨県教育委員会 1993.
 - (9) 野代幸和 他 「東山北遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第79集 山梨県教育委員会 1993.
- 出典
- 第15図 1~8, IV a 区第68号住居 9~13, IV a 区第92号住居 14~18, IV a 区第99号住居
 - 第16図 1, Ⅲ区08G07 2, Ⅰ区第15号住居 3, Ⅰ区01R10 4, Ⅱ区08G14 5, Ⅲ区08C05 6, Ⅰ区01S11 7, Ⅲ区08I03 8, Ⅰ区01O10 9, Ⅰ区01R10 10, Ⅰ区01O10

調査組織

調査主体 山梨県教育委員会
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査担当者 三田村美彦（主任文化財主事）、清水裕司（主任文化財主事）、石神孝子（文化財主事）雨宮信仁（非常勤嘱託）、阿部 熊（調査員）
 作業員・整理員 依田幸浩、秋山昭二、芦沢ひろ江、芦沢八千子、雨宮朝子、飯室菊美、石川茂子、石川千年、石川房男、井上時男、井上九二雄、井上正子、内田修一、鎌池定一、大森玲子、小沢一枝、小野嘉雄、河西武子、神田久美子、河野とく、小林将子、斎藤いつ子、佐久間篤子、佐藤真佐美、沢登タツエ、志嶽紀子、清水友美子、鈴木みづ子、仙洞田しづえ、千野ふみよ、土井みさほ、内藤孝子、内藤春江、中川美千子、名取清子、新津多恵、原田佳子、樋口京子、樋口しげ子、樋口久子、深沢照明、深沢はる、深沢三千雄、古郡フミ子、保坂よし、望月里子、望月 忠、安原敏夫、若菜永子、依田成美、渡辺洋子、一瀬一浩、村松義仁、駒井健一郎
 協力機関 榛形町教育委員会、若草町教育委員会

報告書概要

フリガナ	ムラマエヒガシアイセキガイホウ	
署名	村前東A遺跡報報4	
副題	一般国道52号線（平西道路）改築工事・中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（Ⅲ、V区）	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第134集	
著者名	三田村美彦、清水裕司、石神孝子、雨宮信仁	
発行所	山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公团東京第二建設局	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3016	
印刷所	（株）少国民社	
印刷日・発行日	平成9年3月21日・平成9年3月29日	
村前東A遺跡Ⅲ・V区概要	所在地	山梨県中巨摩郡御影町十五所
	地図名・位置・標高	小笠原（2万5千分の1）・北緯35度37分 東經138度29分・約280m
	主な時代	弥生時代・古墳時代・平安時代・近世
	主な遺構	古墳時代・堅穴住居址・掘立柱建物址・平安時代・堅穴住居址・掘立柱建物址・近世・溝
	主な遺物	弥生土器・土器・須恵器・鐵器・石器
	特殊遺構	
	特殊遺物	
調査期間	平成8年4月15日～12月26日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第134集

1997年3月21日 印刷

1997年3月29日 発行

むらまえひがし 村前東A遺跡概報

一般国道52号線（甲西道路）改築工事・中部横断
自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査（Ⅲ区・V区）

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曾根923
TEL 0552-66-3016

発行 山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京第二建設局

印刷 (株)少国民社

建設省
岩甲府
不道
路公
團東
京第
二建
設局
事務
員會